

『二上山の恵み』



山は麓に住む人々に自然の恵みを与えてくれた。人々は絶えず感謝を込めて、山へと登った。

二上山は 昔から人々の 心の支えだった。

すっきりと天を突くような姿の二上山。遠くから眺めても、そのシルエットは豊かなイメージを与えます。古代からこの地に住んだ人々は、きつと朝な夕な、山に向かつて、その恵みの大きさに感謝したに違いありません。それはそのまま人間の自然に対する畏敬の念を現しているはずです。ともすれば現代に生きる私たちが忘れがちなことです。

四月二十三日にダケノボリという風習が行われています。今では春のレクリエーションのように思われていますが、もとは二上山の山の神に感謝した行事に違いありません。地元の集落でお年寄りにお話しをうかがうと、小さいころはとても楽しみだったと必ず語られます。父や母に手を引かれ、家で作ったこちそうのお寿司を持って登る山道は、険しいというより面白さでいっぱいだったことでしょう。子どもたちにとって、のどかな春の日、山は緑に燃え、心弾む一日だったはずです。しかし、このダケノボリの風習は、二上山の山からの水の恵みに感謝することから始まったといわれています。また二上山の山影が届く範囲の集落で行われたとも。もともと降水の少ないこの土地において、二上山の山ひだに吸い込まれた雨水は、貴重なものだったはずです。水は山の木々を茂らせ、地中に染み込み、山麓の畑や田をうるおしたのです。それだけではありません。きつと、この山の見える所に住む人々の心の中をも、うるおしたに違いありません。

二上山の洛陽は 古代信仰の原点。

大和と河内を隔てて、その雄姿を見せる二上山は太古からの信仰の原点だったようです。三輪山が昇る朝日の神の山とすれば、二上山に落ちて行く夕日は、また輪廻転生を象徴するものであったようです。この世とあの世を分ける境界、浄土への人々の憧憬をこの山の姿に見たに違いありません。二上山の背後に沈んだ太陽が再び東の空から昇るのを見て、二上山の彼方に送った死者の魂が再び現世に現れると信じたことでしょう。

二上山の周りには浄土への信仰が色濃く漂っています。二上山とその東麓に続く丸子山を背景にして立っている当麻寺には、中将姫の伝説が残され、「死者の書」という幻想的な書物が書かれました。それもこれも二上山の持つ神秘的な世界が、人々の心を打つ何かをもたらすからでしょう。

現在、二上山には山頂の岳の権現さんや葛木二上神社を始め、山裾にも数多くの神社やお寺が存在しています。香芝市では十一面観音で有名な専称寺や春日神社などがあります。もとは専称寺の観音さまと対であったといわれる一本松の石仏は、二上山へ向かってやさしいまなざしを投げかけていました。

また阿日寺は二上山とのゆかりが深い寺です。この寺を興したと伝えられている源信僧都が、二上山の落日を日々眺めて、浄土の信仰を確立したといわれるからです。源信はこの地に生まれたと伝えられ、浄土の思想を確立し、「往生要集」を著しました。阿日寺には今なお安樂往生を願う人々のあつい信仰が集まっています。

二上山へ向かい合うようにいらっしやる石仏のおだやかなまなざしに、人々の感謝のあつさを見る思いがする。

